

## 提 言

## 子どもの事故予防の視点

別所文雄 (杏林大学医学部小児科)

相変わらず子どもの事故のニュースが後を絶たない。一つ報告されて対策が取られると少し違った別の事故が発生するといった追い駆けっこのごとくである。このことは、起こった事故の分析とそれに基づく解決は重要であるが、それだけではすまない事故発生の原理が存在することを示唆しているように思われる。

私事になって恐縮であるが、改めて子どもの行動の不思議さを身にしみて知ったことがあるので取り上げてみたい。先日1歳の誕生日を迎えたばかりの孫がやってきた。来るという予告があり、どんな発達段階であるかも常々聞いていたので、それに応じた整理整頓を心がけていたつもりであったが、いざやって来るとほとんど意味がないことが分かった。整理整頓を子どもの目線でやったつもりであったが、実際には空間的な目線でやっただけでは不十分であることに気づいた。

キョロキョロ見回していた目線が一カ所に固定すると同時に急にシャキッと緊張が走る。その目線を辿ると決まってそこには大人の感覚では何でそんなものかと思うようなものがあり、与えられたおもちゃを放り出してそのものに向かってまっしぐらである。目線は空間的なものだけでなく、目の奥にある脳の働きを含めて考える必要がある。また、発達の段階により危険の内容が変わってくることは当然であるが、問題は発達も決して静的なものでなく、極めて動的なものであることである。はいはいで動き回るようになったころは知っていたので、2階の階段から落ちないように注意し、階段の下にいるようにすれば安心と思っていたところ、あつという間に2階に這い上ってしまいあわてて後を追うような羽目にもなった。マンション生活では経験できない冒険に心をかき立てられたに違いない。これではまだ大丈夫と思っていたことが原因でおこる事故が減らないわけである。

こうみえてくると、この発達段階だからこれこれに注意しなければならないといったやり方では追いつかないことは明らかである。子どもは高いところが好きで上ろうとするし、狭いところを通り抜けることも大好きである。すべてが見えるものよりも物陰にあり一部が隠れているものに興味を持つ。出来ないことをやってみることで出来るようになる、このようにして子どもは発達していくのであろう。子どもばかりでなく、人類の発達も同じような過程でなされてきたのであろう。ただそこに山があるから登るのではなく、困難な登山を成し遂げようとする冒険心があるからエベレストにも登ろうとしたに違いない。動物も山があれば登るだろうが、エベレストの頂上にまで登ることはないであろう。このような冒険心こそヒトと他の動物との違いの一つに違いない。そうだとすると、子どもの周りから危険物をすべて除き去り、危険を伴う行動をすべて禁止するということが可能だとしても、望ましいことではないことは明らかである。危険に満ちたこの世界を大過なく過ごしていく術を教え、実践していくことを補助することも事故防止のために行うべきことの一つと認識し、そのための方策を研究する必要があるように思われる。

このような身の回りの危険を回避するための教育は、周囲にいてそのような危険と一緒に接する経験者たち、その中でも特に親たちが行ってきた。たとえば、細い棒をくわえて走り回ってはいけない、回転ドアで遊んではいけないといったことを親から言われた経験がある。しかし、親にそのような能力が欠けてしまっている現在、誰かがその代わりにすることが必要である。小児科連絡協議会の少子化対策プロジェクトの提言にあるように、子どもにとっての遊びの意味の再確認と遊びのリーダーの養成等を含む地域の子育て連携の構築を進めることを提言したい。